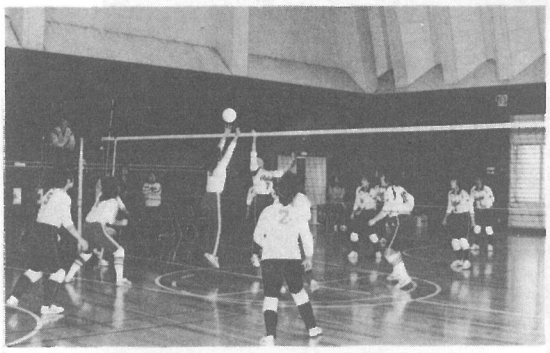
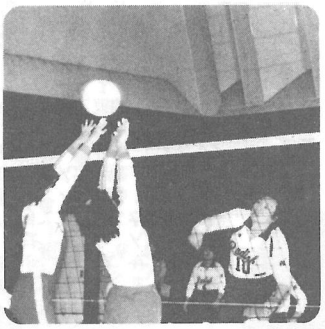
白球を追って ママさん燃える

第7回 町婦人バレーボール大会

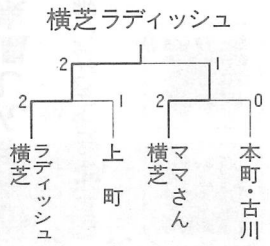
横芝ラディッシュV2——2月26日、海洋センターで婦人バレーボール大会が開かれました。参加したのは6チーム。いずれも十分な練習を積んでいるだけに、試合は接戦の連続でした。





年々レベルは向上しています。ご覧ください、この真剣な表情——。

決勝トーナメントの結果



私のひとこと

ふるさとを考える

伊藤善一（古川）

4月も半ばを過ぎるころ、週末になると、夜風に乗ってお囃子の音が、青年館から流れ始める。新しいふるさとづくりの息吹となって——。

12～13年前、急激に膨れ上がっていく集落の中で、仲間数人が集まると決まって話題に上ったのは、年ごとに失われていく自然と歩調を合わせるかのように薄れていく、ふるさと意識に対する嘆きであった。

先人たちが営々として築きあげてきた、数百年の歴史を持つ民話のふるさと——古川。大地に根ざした連帯と土の香りのするイメージが、自分たちの意識の中で崩れていく。そうした寂しさを、新しいふるさとづくりへのエネルギーに変えていったのは、やはり、ふるさとに対する愛着心であったと思う。

その第一歩は仲間づくりであった。まず自らが「新・旧」といった意識を捨て、幼な友達に抱く友情と同質のものを育てていく努力をする。そして、年に一度老若男女が集まることのできる「ふれあいの場」——お祭り広場をつくることであった。

回を重ね、10周年を迎えた昨年のお祭りの日。古川に居を構えて3年めの、福島出身の仲間が小鼓を打つ。青森・岩手出身者が祭りを盛りあげる。

わずか数名の仲間の輪が、「ふるさとづくり」という言葉をきずなに40名の大きな輪になり、それを区・婦人会・PTA育成会を中心とする人たちが支えてくれる。喜々として走り回る子供たち。この日に合わせて里帰りしてくる人たちの姿を見るとき、自分たちがめざしているものの確かさと、古川に生きていくことの幸せを感じる。

ふるさとづくりは仲間づくりから、仲間づくりはおもいやりから、そして、その出発点は職業・宗教・思想的な枠から一歩踏み出したところにあるのだと思う。